

□ R. Gordon Wasson: **Mushrooms, Russia and History.** 2 Vols. Folio. 重量 6 キロ, 出版所 Pantheon Books, New York 限定出版 定価 \$ 125.

実物を見ぬうちは好事家のものした贅沢書と思つたが、一見して感嘆久しいものがあった。更にその人柄を知るに及び、著者と本書に対して次第に旧知のような親しみが湧いて来た。フランスの菌学会員 1000 人のうち半ば以上はアマチュアであること、アメリカには過去に於て C. G. Lloyd という “A somewhat eccentric American businessman and amateur mycologist” が世界的に有名であることなどを考えると、菌類の豊富な日本に “Mycophagist” の少いのが却つて世界の不思議であるとも云える。さて本書の著者は「ニューヨーク市ウォール街 23 番地 ワッソン様」で通るモルガン商会の副頭取 (Vice president) であり、30 年来野生キノコの文化史的研究に興味を持つている人ださうである。私はこの人と書物を識つたのは彼の友人であり、永く日本に居つて日本学の研究にも名の知れた Paul C. Blum さんの引合せによる。Life の本年 6 月 10 日号に世界の Great Adventures 第 3 特集号のトップ記事として多くのカラー写真と 15 頁に亘る記事でメキシコで昔から行われているキノコ祭りの神事が紹介されて居り、この雑誌を持つて Blum さんが我々 2 人を引合せようとしたのである。その記事というのは Wasson さんがその神事に参加して所謂奇なる中毒症状を呈するキノコを自ら食べ、幽幻な世界に入つて色々なヴィジョンを見た経過を科学的にかつ文学的に綴つたものである。何故彼がキノコに興味を持つに至つたか、30 年前には彼は単なる新聞人で、Mycophobia つまりキノコ恐怖症人であつた。しかし現夫人と結婚するに及び宗旨一転して Mycophila となつたという。つまり奥さんが白系露人であり医者であり、且つキノコ礼讃者であつたからである。そしてキノコは神のために用意された食物であるという信念の下に古代ギリシア、ローマなどより伝わるキノコ関係の文献を蒐集し、また歐洲のフリースランド、プローベンス、バスク、ラブランド、米大陸のガテマラ、メキシコなどに何度も往復して、現に行われているキノコ祭りの資料を集め、斯くして一応まとめたのが本書である。書名に Russia とあるのは奥さんの故郷であるロシアの人人は伝統的にキノコが好きで、色々の記録もあるからである。本書には多数の豪華な色プレートが挿入されてある。著しいのはジャン アンリー ファーブルが 1885~1895 年につくつたと思われる多くの立派な色彩図と観察記が載つていることである。ファーブルの旧家の書棚の隅から探し出されたという。これらのプレートは印刷費と出版技術の点で特にイタリアで製版されたという。メキシコのインカ帝国時代にはトウモロコシを素材とした彫刻が多いことは前から有名であるが、キノコが斯くまでに石彫などに用いられて居つたことは本書で初めて知つて意外な感があった。中国に関する記事は靈芝があるにすぎない。今後は中国や日本の伝承ものにしたというのが著者の腹らしい。またニューギニアの Wahgi 河の上流地方で行われているキノコ祭りも将来の研究テーマらしい。早速ブルム氏を通じてワッソン氏に連絡したら、丁度歐洲の商用から帰つたば

かりで、これから8月半ば頃までメキシコで研究の続きを行うという。以上のことを草野先生にお話したら「今たとえばオオワライタケを食べて陽気になつたらどうだと云われても、先づ今の日本の菌類学者を信用しないね」との事だつた。これが一般の日本人の特性でもあり、また我々専門家の信用程度でもあるか。(小林)

□ Fernand Moreau: **Les Champignons**. Tome I (Encyclopédie Mycologique 22) Physiologie, Morphologie et Développement XV+940 pp. figs. 465 (1953). Tome II (Ency. Mycol. 23) Systématique IV+1180 pp. figs. 835 (1954). Edit. Paul Lechevalier. 値段 30,000 円位.

著者はカーン大学の教授であり、菌類発生学の大家、妻君も菌類学者である。息子の Claude Moreau はバリーの科学博物館で Heim 博士の許で Sphaeriales 及び病理の研究をして居り、既に著書や論文も多い。その妻君も菌学に従事している。斯様なアクティブな菌類一家に生れたのがこの野心的な大著である。菌類学の殆んどすべての内容を一つの単行書中に納めることは、丁度ストラスブルガーの植物学教科書のような体裁を思わせるが、しかし高等植物と異つて生理や発生などが分類と切つても切れぬ連りがあるので、分類の理論を根本から検討するためには、どうしてもこれらの問題を委しく解説する必要はある訳だ。我々にはアメリカに比べて少しく縁の遠くなつたフランスはじめ歐洲の最近の論文が縦横に引用してあるのは嬉しい。しかし日本の文献も今は馬鹿に出来ない和我々は自負しているのであるが、あまり本書中には見当らない。第1巻で特に目につくのは著者の得意とする発生及びそれにともなう遺伝変異の項である。第2巻は全巻を分類に当ててある。従来の分類のシステムを根本から否定して居るのも小気味がよい。子囊菌類や担子菌類などの名はどこかへ雲散霧消して、教科書学者にとつては茫然たる対象である。新しい分類群の名、即ち新綱、目、科名に相当するものを多数に提案している。普通ならばちゃんと“植物”の命名規約にしたがつて有効になるように発表するのが常識であろうが、著者は斯様なことにはこだわらないらしい。自分の提案したシステムを委しく叙述してなるべく多くの学者に批判して貰い、多くの同意があれば次第は誰かが(或は自分が)正式によい名を発表するであろう。或は自分の名も採用して呉れるであろうという考えらしい。自分の専門でもない部門の新名までも“正式”に発表して、永く名がのこることを望んでいる者の少くない時代には、真にのんびりした態度である。菌類のオリジンは何かということに関して、現在は一層多説多彩であるが、著者は Zooflagellata 類似の何かに祖先を仮設している。斯様な考えはヘッケルのプロチスタ以来、あまり新しいことではないが、あまりに現存の藻類などに捉われた見解が多い現代に、ロマンチックな科学者の態度である。全巻 1300 の挿図のうちに写真が一枚もない。菌類の写真や色刷りは他にたくさん良い出版物があろうからとの意であろう。本書出版以来アメリカの菌学界の第一人者 Martin 博士、他 2-3 の共鳴者も既に出ていたので今後の一層の発展が待たれる。(小林)